



筑紫女学園大学リポジト

現代華文文学にみるインドネシア社会問題の諸相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kirin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/982

現代華文文学にみるインドネシア社会問題の諸相

石 其 琳

Aspects of Indonesia Social Issues through
Contemporary Chinese Literature in Indonesia

Kirin SEKI

筑紫女学園大学研究紀要 第14号別刷

2019年1月

福岡県太宰府市石坂

Reprinted from *Journal of Chikushi Jogakuen University*

No. 14, pp. 81 – 95, January 2019

Ishizaka, Dazaifu-shi,

Fukuoka-ken, Japan

現代華文文学にみるインドネシア社会問題の諸相

石 其 琳

Aspects of Indonesia Social Issues through Contemporary Chinese Literature in Indonesia

Kirin SEKI

前 言

本論は「インドネシアにおける現代華文文学への視角」の継続研究である。同作品集《風は海から吹いてくる》を中心に、多くの作品を取りあげ、華文文学創作の視角から現地社会における華人意識の表現を考える。また作者たちが現地生活を観察し、インドネシア社会への描写から見える問題とその特徴性を明らかにすることで、彼らの一住民としての心境と創作意識を考察しよう。

前回の論文において、すでに作品集《風は海から吹いてくる》の出版がインドネシア華文文学における重要な位置づけを記し、インドネシア華文文学の発展と深くかかわるインドネシアの華人移民の歴史と社会地位の複雑な変遷背景、そして現地の華文教育にもたらした影響と問題を論じた。今次の本論は、前回同様に具体的に作品を取り上げ、作品の内容と創作テーマを中心に、作者たちが描写するインドネシア社会の深層を考察する。

I 作品のタイトルについて

ここでまず作品集のタイトルについて考えたい。作品集の名称として収録された作品のタイトルを使うことは特別な事例ではない、重要なのは編集者がなぜその作品のタイトルを使ったかを注目したい。実は今回タイトルが使われた作品は、すでに2004年東瑞氏主編で出版された《印華微型小説選》(香港獲益出版社)に収録されている、今回の作品集に編集者がもう一度収録され、さらに作品集のタイトルにも使ったのである。彼が編集したいくつかの作品集に、マレーシア編とインドネシア編だけこの方式をとっている。

この二つの地域の作品集は、書名「インドネシア華文微型小説選」と明記するほかに、特別に収録されている作品の題名を取って、作品集の主なタイトルとしてつけ出している。当然タイトルになる作品を選ぶにあたって、その作品の内容を通して、編集者自ら重要な意図があったと考える。

前回の論文でも触れたように、今次取り上げる作品集の編集者の欽鴻氏は、これまでの華文文学関連の作品集において多くの編集経験を持ち、特に華文「微型小説」関連の作品集を数冊編集して

いる（注1）。同時に彼は現代文学の有力な研究者でありながら、海外の華文文学を研究して数多くの業績を残している。また現在現代文学界の新ジャンルで盛んになっている華文微型小説の発展に関心を持ち、中国本土以外の地域の作品集に力を注いで、複数冊の編集出版をしている。このことについて、欽鴻氏が2015年に亡くなった後、作家の友人東瑞氏夫妻がその弔文（注2）中で、彼がマレーシアとインドネシア現地の作家たちの作品集を編集し出版したことに對し、これまで海外華文文学の発展が欧米地区の作品を中心に注目されている考えを変え、東南アジア地域の華文文学の発展に関心かつ重要視した点について、深い感謝の意を表明している。

欽鴻氏は、インドネシア地域は世界で華人が最も多いにもかかわらず、華文創作が特に難しい歴史現実背景をもつ地域であることに起因して、華文文学の発展と発信力が遅れている実態に對し、華人作者たちの創作活動を奨励しながら、今後の発展を期待している。

マレーシアの華文微型小説作品集のタイトルについてはすでに論じたので、以下はこのインドネシア地域の作品集のタイトルについて考える。編集者のそれを使った理由と思いを理解するには、まず作品の内容から見よう。

作品① 《風はどこから吹いてくる》 雲風 作 （1950～）

凌翠風はジャカルタ博愛小学校3年の編入生で、スマトラ島のガイエンアビから来たばかりだった。小さいころから両親に「風ちゃん」と呼ばれ慣れてきたため、学校でもすぐにそう呼ばれるようになった。編入生なので、遅れないように家庭教師をお願いして、風ちゃんの勉強を助けている。その夜、いつものように風ちゃんの勉強中、両親はテレビを見て、番組が「性教育の座談会」を放送している。有名な産婦人科医が出演して、子供に正確な性教育知識を伝えなければならないと主張し、また子供から質問あっても、回避せずに対応したほうがいいと話していた。

ある日、風ちゃんは勉強を手休みして、母親のところによってきて「ママ、風ちゃんはどこから来たの?」と聞いた。その質問に驚いて、娘の疑問に満ちた表情を見て、回答に困ってしまった母親は「この問題は難しいから、パパに聞いてね」と言った。風ちゃんは不可解ながら、父親のところへ「パパ、早く教えて、風ちゃんはどこから来たの?」と聞いた。父親も吃驚して、困惑そうに「風ちゃんまだ小さいのに、もうこんな問題を聞くのか?」と、風ちゃんは催促して「早く教えてよ、彬彬ちゃんから何度も聞いてきたから、私は全然答えられないの。」と言った。「彬彬は誰なんだ?」父親が聞いた。「彬彬ちゃんは私の仲良しの友だちよ、どこから来たのかを何度も聞かれたが、私はわからないと言ったら、じゃ放課後、家に帰ってパパママに聞けばわかるでしょうと教えてくれた。そしたら私は彬彬ちゃんに反問した、あなたはどこから来たの?彬彬ちゃんは『私は西ジャワ島のジンリウンから来ただよ!』と教えてくれた」、この時、母親がお茶を入れて一口飲んだところで、風ちゃんの話聞いてお茶を嘔き出してしまいそうだった。

この作品は実に単純明快な内容で、風ちゃんは編入生のため、当然同級生にどこから来たかを質問されるだろう。しかし意外なところで、その質問は単純な誤解が生じ、親子の間に緊張感を迫ったのである。その親子の対話の様子と心理状態を生き生きと描写しながら、うまく結末を締め括っ

た展開は、微型小説によく見られる表現手法と言えよう。しかしこの作品に最も注目しないといけないのは、作者が作品中に明言しなかった本当の「回答」が醸し出す真意を暗示したと考える。

作品集のタイトルは、上述作品から取りつけたに違いないのである。内容は子供からの極めて素朴な質問に、逆に親はテレビなど外部からの影響を受け、勝手に質問を複雑化させてしまい、答えに困惑する様子を描写している。また作者は主人公の子供に「風ちゃん」という名前を付けたのは偶然ではないと考え、編集者は作者の真意を感じ取って、自ら子供の質問にある「風ちゃん」の名前を「風」にたとえ、「風」は海から吹いて来たのだとさりげなく回答するのである。

実際には作品集の表紙に、「彼らは己の筆で故郷への思念を表現し、島の空に点在する多くの星は彼らの見るもの、考え、思いを語っている・・・闇夜の海には、必ず異郷人とめぐりあえるだろう」と記している。タイトル「風は海から吹いてくる」は、まさに編集者の深い思いであろう。

この作品の作者の祖籍が中国広東省だが、本人は1950年のインドネシアスマトラ島生まれ育ちである。編集者がこのタイトルに託した思いは、作品を通じて「風ちゃん」だけではなく、この地で生きる華人たちに対して、その先祖たちみな「風」のように、海を越えてこの地にたどり着き、それぞれ新たな人生を開拓してきたのである。彼らが共通に持つルーツを示唆し、その原点を再確認したうえ、今後インドネシア華文文学創作の原動力として推進できると期待している。この点に関して、実際欽鴻氏は作品集のあとがきで、これまでの困難な状況を耐えながら創作を続けた先輩作家たちを含め、作品集に収録された五十数名の作者の百余りの作品に書かれている様々な人生ドラマ、長年華族がこの地で経験した苦難を極める歴史、また現地の人々と社会に溶け込む忍耐と努力を物語として、多くの作品の中に描写されていることに触れ、そして彼らが華人としての自覚があるからこそ華文創作の原動力になったと、作者たちを温かく励ましている。

タイトルの「風は海から吹いてくる」言葉は、作者を含め、現地の華人たちにとって、単なるルーツ探しを意味するのではなく、華人たちが生きていく、また華文創作が続けられる何らかの精神的な支えであると考えられる。

作品集には、華人社会について、そしてインドネシア社会に関わる多くの問題をテーマにとりあげている。次章より、さらに具体的に作品をとりあげ、その内容と表現を考察する。

II 家族関係と伝統についての描写

華人が移民として現地で生活するにあたって、自分たちの伝統を維持すると同時に、当然様々な文化的、社会的、さらに政治に関わる問題により、彼らの生活が大きく影響を受け、現実との葛藤が多く生じるのは必然であろう。以下はこのような内容を表現した作品をとりあげる。

作品② 「踏み出せない小さな『相思巷』」 柔密歐・鄭作 (1924～1995)

種をまかなければ、豆を収穫することはできない。「青春」という季節がなければ、相思樹には茂るまい？大都市のジャカルタ市にある小道が「相思巷」と呼ばれている、誰もこの巷名の由来を考証していない、おそらくあまりにも遠い昔からそう呼ばれて、人々はすでにその名前に慣れたか

らだろう。しかし私は、この彎曲の小巷に、生涯嫁にいけなく、この小巷から出られない琴姑という女がいることを知っている。

傅おばあさんの家の正堂に、「詩礼伝家」と書かれた額を見れば、この路地で有名な書香名家であると知るだろう。だが昔から傅家は旺盛な家系気配は見えなかった。いつも静かで、家には母と娘以外、数十年女中を務めた安東ばあちゃんだけだった。(中略)上品で美人だった琴姑はいまだに結婚できない・・・彼女は壁に飾っている姉の遺影をみると、死んだときいくら頼んでも目を閉じない光景を思い出すのである。この家の陳腐な礼教に絶命的抗議したかわいそうな姉だった。もちろんこれは母親の一貫した作風の結果だった。琴姑も母に対し不満があっても、良い娘を演ずるために諦めるしかなかった。(中略)琴姑は毎日欠かさず綺麗な女紅(嫁入りのための修業)をしている。その枕カバーに綺麗に刺繍された戯れる鴛鴦を見て、「綺麗だね、今度嫁に行くときは買わなくていいだね」と褒められるが、彼女にはその鴛鴦が目刺さるほど嫌だった。毎日母とだけの生活は、変化がなく、寂しさに無念でしかなかった。(以下略)

この作品の作者はすでに他界していたが、早期華人たちの生活の現実と心態を繊細に描写している。確かに異国の地で、華人として自分たちの伝統と誇りを捨て、現地へと溶け合う難しさは、その作品が描いた当時代において、かなりの抵抗があったに違いない。しかしその伝統を守る裏には、時代が変わり、特に婚姻問題になると、必ず現地の難しい環境と問題に直面せざるを得ないだろう。「詩礼伝家」と掲げた外見に、文化、習慣、さらに宗教も違う土地で、琴姑と姉ともにその古い世代が固執した価値観の犠牲になっている。このようなテーマと問題は移民社会に多く見られ、小説よりもかなりの現実性がある。作者自身は20世紀20年代インドネシア生まれで、第一世代の移民ではないが、彼が生きてた時代の華人社会の華人意識の執着心態、または現地社会との融合感覚に対し、今とかなり相違するであろう。同じ問題として、現在の華人社会にある多様な価値観から変化がみられたが、違う形で複雑な現実問題に直面しなければならないのも事実である。

作品③ 「第6番目の女赤ちゃん」 金梅子 作 (1942～)

錦明は急いで産婦人科病院へ入るやいなや、母親の蒼白な顔と妹のやきもきする様子を目にした。「生まれた？順調？男？女？」と母親に尋ねた。母親は彼の手を握ってそばに座るようにうながし「緊張しないで、男か女かは宿命なのだから」と。錦明はまた希望が破滅したと「そうか・・・本当に、また女だって？」、母親は頭を左右に振りため息をつき、彼の怒りを鎮めるため「いいじゃない、男も女も同じだから」と言った。五年間に五人の女の子が生まれた。妹はお兄さん夫婦本来仲が良いのだが、今回の出産が二人の間に感情を崩壊させる要因になると感じたのだ。(中略)その後、兄の悪い態度にガマンできなくなり、妻は一番小さい女の子を連れて実家へ戻ってしまった。(中略)二年後、産婦人科の病院の廊下に、希望に満ちた錦明が座っている。分娩室から赤ちゃんの泣き声が聞こえてきた。十分後分娩室のドアが開き、看護師が錦明に会釈して中へと、「生まれた？男？女？」と錦明。看護師は頭を振って、同情的に「やはり女の子です、しかしとてもかわいいですよ」と。錦明はソファに座り込んでしまった。また第七番目があるのだけど、女か男かは、

神様しか知らないと思はれた。

この作品は、現地の華人社会に限らず、多くの国と民族によくある血統伝承の問題を描写している。またインドネシアにおいて、特に宗教の背景により、家系に男の子がいることがとても重要視されている。一方華人移民として、自分たちの家系を現地で根付かせ、長く伝承できることを重視する以上、より一層男尊女卑の観念に執着するであろう。作者は2012年まですでに数冊の作品集を出版している、中にはこの作品名を作品集のタイトルにしたのが見られる。作者がこの作品を重視し、自分の作品集のタイトルとして打ち出した理由に、インドネシアの華族が末永く家系伝承のため、古くて不条理な価値観から脱出できない強い現実的意識を指摘している。また最後の描写に「神様しか知らない」の表現から、人々の深い無念さが露呈されている。

作品④ 「最後の孝行者」 白羽 作

方お爺さんは静かに葬儀社の棺桶の中にいる。死後二日になり、今日は三日目で、もう最後の日だ。厚い棺桶の蓋はまだ閉じられていない、海外へ移民した五番目の息子に最後の遺容を見せるため待っている。

方お爺さんは子供たちが自立して家を出た後、古い家は離れたいし、近隣には古い友人も多く、妻と長年一緒に生活していた。妻の死後には、男の人の住み込みをお願いして、生活の面倒を見てもらっていた。ある日、不注意でトイレで転んで急死してしまったのだ。子供たちはすぐにオーストラリアに移民した五男に帰るよう連絡したのだが、五男からは急用のためすぐには帰れないと。今日はもう三日目だ、葬儀社の使用料が高く、ほかの兄弟から不満が出始めた。8時過ぎ、担当者から通知が来た。10時に棺を閉め、10時半にお経を唱えた後、12時出棺で火葬場へ出発。兄弟たちは費用の計算をしながら、時々門の外を眺めて、もう9時だ、そろそろ着くんじゃないかと五男が間に合って帰ってくるの期待していた。突然廊下から急ぎの足音が聞こえた、全員が目線が門の所へ。だが同じ路地に住む雑貨店経営の隣人マスイタだった。

「ああ、間に合ってよかった。私は4日前里帰りして、お爺さんが亡くなったことを知って、すぐに快速列車に乗り昨晚戻って今朝早く来た。なかなか場所が分からなくて、三回乗り換え何人にも聞いたのだが、やっと見つかってよかった。私はオウランドア（老人）に告別したい」と、満身の汗を拭きながら言った。そして老人の遺影の前に手を合わせ礼拝した。長男に「お兄さん、お爺さんは本当にいい人だった。私は原住民で、お爺さんは唐山（中国大陸を指す）から来た人だが、数十年同じところに住んでいるし、親子みたいだったよ。生きていたときはいろいろ教えてもらった。商売のやり方、人との交流、誠信、敬老、節約・・・どうすればお爺さんに恩返しできるだろう」と、泣きながら話した。「前にお爺さんに義父としてお願いした、それで私は義子なので、最後にお爺さんの顔を見せてください、よろしいでしょうか？」と尋ねた。長男はすぐに彼をお爺さんの所へ伴い最後の顔を見せた。そしてマスイタは涙を拭きながら、記帳して、白い封筒を取り出し、名前を書き、香典箱に入れて、悲しいあまりに隅のほうに座っていた。この時、「ピーピー」と長男の携帯が鳴った、「お兄さん、申し訳ない、今朝会社から通知があって、アメリカに重要な

国際商務会議参加するようと言われた。お父さんの後事は、お兄さん姉さんに頼むよ……」。

これまで華文学の作品を研究して、現実生活に親孝行の見せ場の一つとして、親の葬式時の子孫の行いをテーマに取り上げる作品が多数見られる。移民として、如何に華族の文化を伝承できるのかは、もっとも華人意識を問われる場面の一つであろう。また華族として、自分たちが課せられた伝統礼儀を守らなければならないが、移民社会の住民として現実を直面せざるを得ないである。作品に「最後の孝行者」は皮肉にも隣人の原住民のマスイタであった。親世代が現地住民と深く融和したぬくもりの描写に感動する一方、期待された海外へ移住した五男は仕事のため、葬式にも帰れなかった結果に対し、家族からは許すべきではないような雰囲気が作品に漂っている。

東南アジア地域の華人たちは、次世代がもっと良い将来を求め、さらに他国へと移民することが普通にみられる。その現実背景から、常に華人家族に多くの葛藤と問題をもたらしている。さらに現地で生活する親子世代においても、社会風潮の変化により、多くの問題が露呈している。この点について、次もこの作者の2作品に触れたい。

作品⑤ 「転宅の憂い」 白羽 作

運ぶべきものはすべて運ばれた。実は嫁さんの新しい鏡台と一つ大きなトランク以外、新居へ持っていく価値あるものはほとんどなかったのだ。古くて数十年使った手垢が付いた古い家具なんか、綺麗な家に持っていくのは恥をかくだけなんだ。息子夫婦が車へ向かいながら「この古い家が売れたら、いつでもうちに来て、一緒に住めばいい」と言ってくれた。老夫婦は黙って微笑みながら彼らの車が遠く消えていくのを目送した。

昔のことを思いだした。当時情勢が急変し、華文学校がすべて封鎖され、二人は「人間の魂に触れる」文化事業従事者という誇りがあったが、同時に失業してしまった。五人の子供を抱えて、以後の生活は如何すればと苦難な日々が続いたのだ。路頭に迷ってしまいそうなとき、妻が持っている貴金属の飾物を売り払って、普段節約してためた貯金を合わせて、自宅の前に小さな雑貨店を経営し始めた。(中略)夫婦が懸命に頑張って子供をみな離島の大学を卒業させた。(中略)その後、二男二女の子供たち各自で結婚し家を持ち自立できたが、最後の五男だけはまだ同居していた。半年前、家の前の小道が大通りへと広げられ、スーパーマーケットができて、雑貨店の顧客が減り、店を閉店したのだ。

五男は大学卒業後、すぐに就職でき、結婚して夫婦二人頑張って貯金して、ローンで家を購入した。内装が終わり、両親を連れ新居を見に行った。いい環境できれいな家に着くと、父親は車を降りて、すぐに庭へと入ろうとした、不意に転びそうになった、ああ、階段があったな……と。家に入るとまだ階段があって……右へまた階段……浴室はどこかなど？大きなりビングから階段で降りて、地下室みたいな部屋があった。ここは何に使うの？使用人の部屋？それとも貯蔵室？いいえ、ここはお父さんと母さんに用意した寝室なんだ……

「ポン！」と妻が門を閉めた大きな音で、彼はふっと回想から戻った。身を振り返って、隅に「喬遷之喜(転宅の慶び)」の大きな鏡額が見えた。近隣の方たちからいただいた引っ越しの祝い品だっ

た。四文字はこの城市の有名な書家に書いてもらったのだ。しかし前日、引っ越し業者の方がこれを新居に運ぼうとしたら、嫁さんに「この額に何が書いてあるの？ああ、中文なのか、運ばなくていい、私たちの付き合いの同僚と友人はみなインドネシア語、英語、日本語が分かる人です、こんな物掛けたら、恥ずかしいし、新居に合わないからね！」と、そばに立っていた両親は黙って、憤慨するあまり、その「喜」の字が大きな「憂」に見えたのだ。

不景気で家前にかけている「売り家」の看板は、もう数か月過ぎたが、問い合わせの電話一本もなかった。・・・ある晩、老父が妻に相談した。子供が家はなれたし、部屋が空いて、大工さんに頼んで、小さな部屋を作り、女中さんを頼み、毎日掃除をしてもらい、前の看板を下げて、「同居者募集」の看板に取り換えるのだ。老夫婦は新居に引っ越さないことを決めた。

この作品は、主人公たち夫婦が華人としての誇り、華人だから被害を受けた痛みと必死に生き延びるための強さを表現している。息子の新居に用意された自分たちの居場所がいかに不適切であり、温かく迎えられていない現実に違和感を覚え、さらに嫁さんが「中文扁額」を軽視する態度に憤慨する心境を切実に描写している。老夫婦は生涯において、失望、希望そして最後の人生の決断に対し、本当に自分たちに適する居場所を悟り、息子の新居への引っ越しをやめたのである。作品のタイトルで、普通に華人の習慣として、引っ越しする際の祝うの言葉であるべき「喬遷之喜」をうまく「喬遷之憂」に差し替え、老人夫婦が直面する現実と無念さを示唆したのである。次は、原作者の前作の続編のような作品をとりあげる。

作品⑥ 「予言」 白羽 作

「ガン！」と重く響く音で、庭にある鉄門が緊密に閉じられたのだ。家に中は、年とったお爺さんと車いすに座っているお婆さんの二人だけだった。

高級車には、若い夫婦と8歳の男の子、3歳の女の子と付き添いの看護師が同乗していた。

賢そうで活発な女の子は、顔を車の窓ガラスに張り付けて、車がどンドン家から遠く離れていくのを見て、低い声で「可哀そうね、おじちゃんとおばあちゃんは私たちと一緒にモールへ遊びに行けないね」と呟いた。「そうなんだね」と男の子も共感して頷き、手を伸ばし、前座にいる母親の肩に触って「ママ、今度おじいちゃんとおばあちゃんを連れていてもいい？」母親は手に持った化粧品を下ろし、少し責めるような口調で「子供は変なこと言わないで、おじちゃんおばあちゃんは、年とって動きたくないし、油っぽい食べ物も食べられないし、家でテレビを見たほうが一番いいのよ」と答えた。理由はとても簡単だが、十分すぎるほどだった。賢い男の子はすぐに理解できた、回転が速い頭で同じことを連想した・・・

「僕はよくわかった。人は年とったら、家にいるべきだ。パパ、ママ、私たち大きくなって、あなたたちが年とったら、おじいちゃんとおばあちゃんみたいに、毎日家にいないといけないよね？」子供の心から発した素朴な直言だった。父親と母親は愕然として顔を向かい合って、無言だった。

世代間の価値観の相違、また高齢化社会の問題は、近年世界の多くの国と地域に共通する問題で

ある。実際にこれまで広域で華文文学作品を見たなか、これらの問題が創作に欠かせないテーマの一つである。なかでも特に移民社会としての事例をとりあげ、現地特有な現実背景を問題視する描写も多くみられる。「最後の孝行者」、「喬遷之憂」そして「予言」から、先代の移民の意識と現代に生きる華人の意識の格差は、時代風潮とともにさまよい続けるであろう。新たに華人が誇る文化伝統がいかにかついで承継できるかは、作品を通じて作者が問いかけたと考える。

続いて現地生まれの作者が多いなか、作品から自分たちが普段生活する社会を観察し、問題をとらえる作品をみる。

Ⅲ インドネシア社会の描写

華人たち自分が生活する異国の社会に対し、常に習慣の相違から文化の衝突に直面するが、その社会に適応していくことも当然である。ここでとりあげる作品は華人自身の生活または現地社会の問題を描くものである。

作品⑦ 「窓の内外」 白放情 作

人々は会ってすぐに意気投合することがある。今年6歳の小明は編入生で来たばかりのカテと座席が隣だったため、最初の授業後、すぐに手をつないで小売店へ飲料を買いに行った。それから彼らは常に一緒に、楽しく学校生活を楽しんでいる。小明とカテは大人のように、仲のいい友だちの家へ遊びに行く。ある日曜日、カテは小明の家で一日遊んで、小明の母はとても親切で、小明の兄さん姉さんも歓迎してくれたが、ただし父親が忙しそうで、一日中姿が見えなかったのだ。「おばさんはいいですね！」カテは笑って言った。「ほら、食べ過ぎて、おなかがパンパンになったみたい」。「私は一番小さいだから、ママは特別かわいがってくれていると姉が言ってる」と小明。急にカテに「あなたのママは、あなたを愛している？」とたずねた。「そうだよ！一人子なので、入学、転校の手続きすべて母がした。父親は忙しいし、ワンロンで仕事しているので、週一回しか戻らない」。・・・「来て、パパの書斎に裸の女がいる」と小明。「なに？裸の女？」「本物じゃない、彫刻なんだ・・・それはパパが好きなガリ彫刻だよ」と、小明が説明した。・・・書斎に入り、カテは壁にかけている大きなカラー写真を見て、驚いて呆然した。「これはパパとママがパリのエッフェル塔で撮った写真なんだ」と、カテが愕然しているのを見て説明した。「その人はあなたのパパ？」信じられないような表情。「そうだよ！」と小明。「なんで僕の父親とそっくりなんだ？」カテはおかしいと思った。「世間、顔がよく似ている人多いじゃない？ほら、あの殺人映画もそうだ、犯人と顔が似ていたから警察に捕まったのだ」。カテは、何にも言わず、再度写真を見て、家に帰った。

一月後、今度は小明がカテの家へ遊びにきた。・・・週末だったので、カテのお父さんはマンロンから戻ることもあって、母親は父親が帰ると、息子の友人が来ていることで二重にうれしく思った。午後4時過ぎ、カテの父が帰ってきた。カテと母が父親を迎えに、小明も後についていたが、前回カテが家で写真見たときの愕然した様子と同じ、カテは「パパ」と呼んだが、小明は恐縮

で迷いながら呼べなかった。お父さんも愕然としていた。最後にカテと小明の手を取って、腰を下ろして二人を抱きしめたのだ。

一夫多妻に対し、現在華人意識の通常概念ではなく、インドネシアでは普通の社会現象であり問題ではない。近年女性の社会進出が増え、事例は減少している。この作品に二人の子供の名前が持つ特徴から、「小明」の華人的と「カテ」の現地民族の名前によって、二つの家庭が違う民族の婚姻によって構成されているのが推測できよう。インドネシアでは、特別な現象ではないのである。華人が現地の習慣に適應する中、当然文化的、宗教的要素をハイブリットに利用されることもある。結局プラス効果になることもあれば、マイナス的被害を生じるケースもある。作品は、子供たちが意外な事実を知ったときの愕然した様子を表現している。大人社会の都合のいい話と言っても、果たして子供たちの心に傷を残さずに現実を受け入れられるだろうか？ 作者は、文化の相違性に対し、如何に有効的、かつ善意的に適應する現実問題を露呈させながら、社会への問いかけだと考える。

作品⑧ 「転職」 雲飛 作 (1949～)

「お爺さん、うちの蘭妮は正月2週間休むと言ったわね、でもすでに二日も過ぎたのに、まだ姿を見せないのかね？」、明お婆さんは掃除しながら忠明お爺さんにたずねた。洗濯しているお爺さんは、腰が痛くて、その話を聞いてすぐに「そうだね、近所の家の女中さんはみな戻ったのにね・・・」「切符が買えなくて・・・それとも病気だったのか・・・」「蘭妮は、転職したじゃないかな、バザーの太った女中のようにね」と、忠明お爺さんが勝手に推測した。「商売を始めたのか？」「そうだよ、うちで十数年務めて、中華もインド料理も・・・ワンタン、餃子、チキン麺・・・全部できる。特に最近ソト麺はレストランに匹敵できる味だね！もしかして・・・」「まあ、彼女は商売できる人じゃないし」。一か月後、夫婦が病院帰りで、「近くで食べて帰ろう、お腹すいたは」と、ちょっとすぐ前に小さい屋台があった。「チキン麺一つ！」忠明お爺さんは座ってすぐに注文した。「ああ、蘭妮じゃないの？」、嫌な雰囲気漂っている、「やっぱりそうだったな」と、小声で妻に。しかし妻は微笑みながら「おめでとう、一歩進んだね！」と蘭妮に言った。忠明お爺さんは不可解に妻を見た。「まさか彼女に一生女中してほしいの？」と妻。

この作品に妻の最後の一言の描写から、作者の自分が生きるこの社会に対する愛情の深さがにじんでいる。また華人たちが昔この地で奮闘した姿が蘭妮から反映されたのであろう。

作品⑨ 「警察と泥棒」 林万里 作 (1938～)

玄関のベルがなって、女中が部屋に来て「旦那様、何があったのかわからないけど、警察があなたを探しています」。出てみると、警察官ひとりがいる。その後ろに殴られて鼻が青くにじみ、顔がはれあがって手錠をかけられている人がいた。警察官は私を見て、手に一台のラジオを持ち出し「ご主人さん、よくみてください、これはお宅のものですか？」「いえ、いえ、うちはこの物は

ありません」と慌てて言った。実はそれが去年の息子の誕生日プレゼントで、半年前盗まれたものだった。今このことを認めることはできない、何故なら、認めるとあとが大変だ。警察は泥棒を指さして「彼は警察局ですでに白状した、これはお宅に入って盗んだのだ。あなたまだ認めないのか・・・あなた自分で彼に聞いて。お宅は物が盗まれて警察に通報しないのは、違法だって知ってますね。もしあなたはミスを認めないなら、一緒に警察署に来てもらいましょう、言い分があれば、録音して、案件を法廷に回します」と強い口調で言った。「大したことじゃないから、ここで解決しませんか？」と私は頼んだ。でないともっと面倒になるの知ってるから。「ご主人さん、あなたは物分りのいい方ですね、双方が同意すればここで解決できます。はっきり申し上げよう、一言、私に30万ドンをくれれば、案件の消去費として、ほら、簡単でしょう？」「30万ドンは多すぎます、あのラジオは新品でも9万ドンで買えます。「いいえ、値下げはできません。ビジネスの商談ではない。よく考えて、私はあなたを困難な状況から助けに来たのです」。仕方なく「わかりました、30万ドンあげるから、ラジオを返してくれますね。」「いいえ、ラジオは物証です、それがないと泥棒逮捕できませんから」と後ろの泥棒を睨んだ。

運が悪いしか言いようがない。警察官はお金を受けて、札を一枚一枚確認した後、「今後また同じことがあったら、必ず警察に通報することですね、しっかり覚えてください」しかし誰でも知っている、警察に通報するだけでお金がかかるのだ。警察に文句言えないので、怒りを泥棒に、「今度また我が家に物を盗んだら、絶対に警察に捕まらないように気を付けろ」と泥棒の鼻先を指さして叱った。

作品⑩ 「通行フリ」 意如香 作 (1941～)

ある日、出張で飛行機乗ることがあった。当日は忙しく空港へ行くのが遅れてしまい、急ぐように運転手に頼んだ。あいにく赤信号にであって、「急げ！」と赤信号無視した。するとすぐに後ろからパトカーが警報を鳴らしながら、停車させられた。私はすぐさま運転手の免許証に一枚の5万ドン札を挟んで、来た警察官に渡した。警察官は免許証を檢視しながら「もう行ってよろしい」。運転手は「ボス、さすがだね」と。その後空港についたものの、十分後に離陸時間だった。カウンターの職員は「もう間に合いません、次の便に変更しましょう!」。私は急いで10万ドンを航空券に入れて渡した。その女職員はすぐに理解して、「急いで、5番ゲートへ・・・」。私は無事に乗れて、飛行機のなかでほっとして、「お金さあれば!」と。だが不思議に、心から何となく不安が湧きあがった・・・

上述二つの作品は、現地のなにげない生活の日常を描写している。作者は、現地の庶民心態と社会の不条理な現実を露呈させ、ユーモアに表現している。作品⑩最後に心からの不安を感じる主人公の思いは、ある意味でこの社会に対して、諦めながらも何かの期待が託されたのではないだろうか。以下は別の視点で、この社会を透視する作品を見る。

作品⑩ 「バスの驚魂事件」 横浜 作

ジャカルタに来て数日がたった。サラリーマンのようにバスに乗るのだが、乗り心地は実によくはない。よくバスの乗客では自分一人だけが華人だったり、乗客が混むと空調なしでとても蒸し暑く、時には席がなく、一時間ほど立ちっぱなしであり、またよく渋滞にかかる。バスのなかで歌でお金を稼ぐ人もいれば、スリにも警戒しなければならぬ。会社についたら満身汗まみれで、こんな生活は本当にたまらない。まあ、子供の会社なので、出勤が遅くなっても大丈夫だ。(中略)

ある日、バスで後から乗った若い女性に席を譲った。彼女は手袋を持っている、「ありがとう」と私に。彼女は大手の輸出企業に勤めているのだが、残業で会社の通勤バスに遅れて、このバスに乗ったのだと話してくれた。・・・しばらくして、前車門から婦人と5、6歳の子供が乗ってきた・・・渋滞にかかった、突如後ろから大声で「金を出せ!」・・・二人の凶暴な男が刀を持って乗客に迫った。一人の乗客はお金を出し渋ったため、殴られて血だらけになった。・・・「時計、携帯も出せ!」、子供はびっくりして泣きわめいている。・・・突然隣の女性が大声で叫んだ「私の手提げを取らないで」、片手は血が流れていても、手提げを放さない、「hatok (早くしろ) !」大男は光る刀で彼女の腕を切ろうとした。私は吃驚して、自身の危険を忘れて、突然彼らの民族語で「unang (やめろ) !」と叫んだ。刀は彼女の腕に止まった。恐怖のあまり、彼女は手提げを手放してしまい、席に倒れ込んで、涙を流し震えた声で「私の証明書、私の証明書・・・」。凶漢は私を睨み付け「行こう!」と手下に言い放ち、離れようとした。「pete jok (ちょっと待て)」と、先の一言が効いたので、私も勇気がわいたのだ。再びマダ語で「Buat ma hepeng ilpaulak ibana suratna (お金は持っていけ、証明書は彼女に返してくれ)」と。凶漢は再び私をにらみつけて「お前死にたいのか?」と、私は急いで「halak hita, ahu pc sien siantar (同郷なんだ、私もセンダから来たのだ)」と。彼は私を一瞥して、二人の手下に「証明書を彼女に返してやれ」と、お金を抜き取って袋を私に投げた。彼女はすぐに袋の中を確認して、腕の血を気にもせず、しっかりと胸に抱きこんだ。三人の盗賊はバスを降りて逃げ去った。

「ありがとう! 証明書は、重要な輸出証明書で、明日船の出港で使うから、失くしたら首になるのです」と、彼女はしどろもどろに話した。「あなたは私一家の命を助けてくれた」。「早く血を止めよう!」「大丈夫!」・・・彼女の腕を守るため、自身の危険をおかしてとった行動に、あとになればぞっとして体が震えるほど怖かった。幸いにも自分が隠しポケットに入れた携帯、時計、証明書とお金は無事だった。まさかインドネシアの一族の言語が話せただけで、こんな緊急時に役に立て、災難から逃れられるとは思わなかった。

多民族国家、さらに多言語から生じる同郷意識は強いであろう。同郷間の団結も重要だが、その反面異民族間の対立も生じやすい。作品は、民族の言葉を話すことにより、同郷意識に共感させる力を利用して、暴力に対抗できた緊迫した一幕を描写している。作者は、多民族の混住で生じる正負両面の問題をとりあげ、華人は常に自分たちの立場と存在感を多角的に配慮し、普段の生活から蓄積した知恵と努力をなしている様子を表現したと考える。

作品⑫ 「救助」 蕭章 作 (1947～)

朝、市場の入口で数人の地元ヤクザが乗り合い車に客引きを手掛けている。一台の客車がゆっくりやってきて客のひとりが乗った。先頭に立っていたヤクザは、運転手が華人だと知るや否や、すぐに紹介料を取ろうと要求した。「客が一名だけでも紹介料がいるのかい？」と運転手が言った。普段では2名以上の客を引れば紹介料が手にはいるのだが。ヤクザは、「ここは俺の地盤なんだ、客さえ乗れば紹介料はいるんだよ」。運転手はヤクザの無理で強引な要求に怒りを感じたのだが、一歩譲って、「今車庫から出てきたばかり、まだお金がないから、この次に払うよ!」、「だめだ、今すぐ払え!」と、ヤクザは横暴な態度で言った。運転手は喧嘩したくないので車を発車させた。ヤクザは「馬鹿野郎! 逃げるのか?」、自分に追いかけを指図して、「絶対にお金を取るんだぞ!」と命じた。自分は「はい!」と言いながら車に飛び乗り、車門に掴まって「停車! 停車!」と叫んだ。運転手はそれを無視して、車のスピードを上げて走りつづけた。衝突は避けられないだろうなと思って・・・約百mくらい走ったところで、ふとバックミラーをのぞいたら、あの自分はいなくなっていたのだ。あんな奴らだから、このままでは済まないだろうと疑問に思いながら車を走らせた。「まあ、禍にならずに・・・とにかくお金を稼がなくては」と思った。しばらくして、一人の中年のスダ族の客が下車した。すると前座の青年客が「運転さん、あなたは運がいいですね、いい人に出会って」と。運転手は「いい人?・・・どういふこと」運転手は不可解でたずねた。青年客は「知らなかったのかい、先に下車した方がお金を自分に払ったから、自分が車を飛び降りて無事に済んだのだよ」。「そうなんだ、本当にいい人だ、お礼を言わないといけない!」。

作品中、地元ヤクザは運転手が華人だったことで、無理に紹介料を強要しているように、インドネシア社会では、多くの政治的歴史的背景により、華人ゆえに榨取の対象として、お金に関わる被害が多い立場にあるのは事実である。しかしその不条理な現実直面した現地の人々にも理解があり、時には助ける側に立つことも多々あるであろう。多民族であるインドネシア社会は、確かにこの類の問題が多く発生している。移民社会と言っても、共存するに欠かせないのは、結局人間対人間の関係に尽きるであろう。作者は黙ってお金を払ってくれたスダ族のひとりから、人間誰しも本来持つ善心と思いやりの心があると確信し、さり気なくその場面を描写したのである。

次は小さな人間ドラマから、複雑な人間社会に生きる究極な姿勢について描く作品を見る。

作品⑬ 「近隣」 雲飛 作 (1949～)

朝まだ明るくならないうちから、ド、ド、ド・・・ド、ド、ド・・・「うるさいね、朝っぱらから誰なの?!」妻は愚痴をこぼした。「誰だっていいさ、うちの門を叩くのじゃないから」と夫。「さあ! あなたは仕事に行って、私は店を開けるから」。二人が乗る黒色の車は、窓さえも黒だった。車内で、「昨日隣のお婆さんが重病でICUに入ったらしい・・・」と妻。「うん・・・今晚隣組長を選ぶとか言っていたから、出席してくれだつて!」、「やはりお金稼ぐのが大事だから、隣人、隣組長なんかどうでもいいんだ、構っておられないんだ」。夫婦二人は、自分たちが賢いと自慢気に思っていた。ここに引っ越してきて以来、近隣との付き合いは一切しないし、村内の活動も無視し

てきた。二人だけの世界で生きてきて、見ざる、聞かざるを貫いてきたわけである。

だが、職場に入ってからすぐにニュース報道が耳に入り、自分が住んでる村に火事が発生したのだ。彼女は焦って夫に電話した。「すぐに近所の人に聞いてみたら」と夫。しかし、彼女は愕然とした、知ってる隣人の電話番号は一つもなかったのだ。仕方なく、少し離れたところに住む従兄に電話して、見に行ってくれと頼んだ。「大変だ、お宅が火事だったよ」と、従兄が電話口から大声で叫んだ。「なんだって？」彼女は倒れそうだった。夫婦二人が慌てて家に戻ってみると、消防隊員のほかに近所の方たちが多数集まって、バケツで水を汲んで、重い電気製品を安全なところに運んだり、消防隊員たちと一緒に救援活動を行っていた・・・

作者はインドネシア生まれで、小さいころから華文教育を受けていたが、高校一年生の時、華校が封鎖されたのである。長年インドネシアで華人たちが世代を超えて経験した様々な困難から、移民社会で生き残るための悟りが作品から伝わってくる。内容的には単に巷で起こった小さな物語に過ぎないのだが、作品は意味の深長さを醸しだしている。確かにインドネシア社会では、多民族、多宗教（注4）から、近所付き合いが煩わしい実態はあるだろう。だがこれも人間社会の最も基盤的構造を反映したといえる。

作品中、自己中心の夫婦の姿勢を拡大してみれば、現在世界中に移民問題が高張する中、各国から保護主義、民族主義が台頭し、さらに自国優先から自分よがりの意識風潮が蔓延し始めている。同じ生活の場として、最小単位で個人が近隣と如何に共存できるかは、広く国、地域、異民族どうしの領域においても避けられない重要な問題である。巷で通用する近隣の相互理解から共存できる常識は難しい理念ではない、人間だれしも備え得る知恵であると作者は訴えたと考える。

作品⑭ 「道を渡る」 菽園 作 （1936～）

買い物籠を下げて、向かい側にある市場に買い物に行こうとする老婦人がいる。車の往来が激しくて、左右を確認しながらもなかなか道を渡れない。一度渡る途中でバイクにぶつけられ、一か月のけがをして、いまだに後遺症がある。それ以来渡るのが怖いのだが、買い物は日課であり渡らないといけないわけだ。向かいに豆腐店を経営している若者がいる、お婆さんがいつも怖そうに道を渡れないの見て、同情して、きつい客家語訛りで「お婆さん、僕が連れていくよ！」と老婦人の手を握って、慎重に道を渡った。それから老婦人に「帰る時には、先にボクの所に来てください、また連れて渡ります」。「本当にいい人だね！」、老婦人は感激して言った。その後、毎日若者は老婦人の道渡りの付き人になった。老婦人もこの若者がヤジから来たのと、子供が二人いることを知った。「奥さんは何をしているの？」と老婦人が聞いたのだが、若者は押し黙って落ち込んだ様子だった。「申し訳ない、聞くべきじゃなかったのね」。若者は頭を挙げて、苦笑いながら「おばあさん、恥ずかしいけど、僕は豆腐を売って、家は賃貸だし、子供に学費がかかるから、嫁さんは台湾に行って家政婦をやっています。老人の介護です」と、「本当に彼女に申しわけないと思っています」と心苦しうに言った。「そのように考えないで、夫婦が協力し家を守るのは当然です。あなたが家で子供の生活や学校の面倒見て、彼女は台湾でお金を稼ぐ、これは協力しているからこそなのよ」

と、老婦人は若者を慰めながら、自分の過去の貧困状態を思い出した。ある朝、若者は喜んで老婦人に「おばあさん、昨日嫁さんから手紙が来て、写真も送ってきて、少し太ったみたいよ、ボクも安心しました」。(中略)

「おばあさん、ほかの人はあなたを先生と呼んでいるが、教えているですか?」、「以前は私たち夫婦ともに先生だったのよ。学校は政府に封鎖されて、二人とも失業、そのとき子供はまだ4歳だったの・・・」、老婦人は20年かけて過ごした苦難生活を若者に話した。「おばあさんも苦勞したのですね!」(中略)「おばあさんは今も教えているの?」「近くで数人の子供に中国語を教えているだけよ」、「子供の学費は全部嫁さんが稼がなければならない・・・」、「あなたの家はどこなの?」、「すぐそこです」、「私はそちらの巷に住んでいる、子供たちを連れてきてください、中国語を教えてあげるよ、学費はいらないからね」・・・「おばあさんは本当にいい人です」、「いいえ、あなたもいい人ですよ!」と、老婦人は情熱く言った。

この作品に老婦人が華文教師であった過去の苦勞があったが、現在も近所の子供に中国語を教えていることの現実背景に、時代の流れで、以前排除の対象だった華文がインドネシア社会での重要性を再認識されている。そして、若者がきつい客家(注5)語訛りの描写から、華人の子孫であることを示している。生活苦のため、妻が台湾へ出稼ぎをしなければならない状況から、彼らもごく普通層の住民である。この国では華人は常に富と連想させるイメージが潜在しているのだが、この作品からは、想像にそぐわない現実社会の一側面を露呈させている。

若者の妻が台湾で働いている(注6)現象は、インドネシアでの労働力の輸出が盛んに行われている背景があり、また同じイスラム教信仰が多い中東などの地域にも多数の労働者が出稼ぎに行っている。作品集にはそれらの実態をテーマにした、多くの差別、苦勞と虐待を受ける状況を描写した作品がみえている。

終わりに

この作品集における50数名の作者は、概ね20世紀30年代からインドネシア生まれ育ちであり、幼い頃からインドネシアで華文教育を受け、後に政治的理由で学校が閉鎖された経験を持つ人も多かった。学習が中断された結果、中国で大学院まで進学し学位を獲得する人もいれば、通信教育を通じて勉学し、独学で華文力をつけた人もいる。彼らの創作領域は、自分たちが生きる多民族かつ移民社会が対象である。作者たちは華人としてだけではなく、一住民としての心境をもって、多視点から、多層な庶民生活に密着したテーマで、この社会の深層を忠実に表現している。作品を通して、インドネシア社会の多面的生々しい実像が洞察できるであろう。

作品の華文表現力について、ほかの東南アジア地区同様、インドネシアという地域性の特徴がよく現れている。例えば言葉に現地住民が最も多い福建、広東方言の文法と語彙が混じった表現が多くみられるが、またそれが作品の特徴として、そこに居住する住民の実生活の実写であり、人々の心と姿が生き生きと反映されていると考える。今回とりあげた作品集では、年齢が一番若い作者は、

1974年生まれの一人だけである。編集者が後記したように、これからのインドネシア華文小説のさらなる進展を期待したい。

注

- 注1 钦鸿氏がこれまで編集した華文微型小説作品集は《華文女作家微型小说选集》上海人民出版社 2004、《香港微型小说选》江苏文艺出版社 2009、《回家：马来西亚华文微型小说选》江苏凤凰文艺出版社 2014、《风从海上来：印度尼西亚华文微型小说选》江苏凤凰文艺出版社 2015がみられる。
- 注2 「老实踏实忠实-悼念钦鸿先生」「東瑞的博客」を参照
http://blog.sina.com.cn/s/blog_c24add820102vo51.html (2018年9月5日アクセス)
- 注3 インドネシア貨幣はドン (IDR)「ルピア」である。10000ルピアは日本円で76円である。(※2018年9月18日相場) <https://ja.exchange-rates.org/Rate/IDR/JPY> (2018年9月17日アクセス)
- 注4 インドネシア国民の大半がイスラム教を信仰しているが、政府は5大宗教イスラム教、仏教、キリスト教プロテスタント、キリスト教カトリック、ヒンドゥー教を国教として、憲法上で平等に権利が保障されている。
- 注5 「客家人」とは漢民族であり、歴代周から春秋戦国時代を始め、戦乱から逃れるため中原から南へと移動、定住を繰り返し、移住先では原住民からよそ者と見られ「客家人」と呼ばれている。彼らが使う黄河中流域の中原客家語は、インドネシア国内ではケイ (Khe) 語とも呼ばれ、華人系インドネシア人社会で広く用いられている中国語の一つである。インドネシア全土の華人社会で使われているが、主にカリマンタン島、スマトラ島のジャンビ地方、そしてバンカ島などの華人社会では日常言語である。
- 注6 台湾での外国籍労働者人口は、社会福祉分野で2018年主計總處の統計ではインドネシア人20万弱の人がいる。<http://statdb.mol.gov.tw/html/mon/212030.htm> (2018年9月19日アクセス)

(せき きりん：アジア文化学科 教授)

